

市史編さんだより



(68)

近世廻り田村の領主

江戸時代のはじめ、市内には南秋津・久米川・野口・廻り田向(のち廻り田)の四か村がありました。当時の各村の支配の様子はわかりませんが、十七世紀なかごろには、多くが代官の支配する天領となっており、廻り田のみが旗本の領地でした。

廻り田村(五〇〇石)を支配したのは、中川氏(三〇〇石)と富田氏(二〇〇石)でした。このように複数の領主が村を支配する形を「相給」と呼んでいます。中川氏は、はじめ織田信長のうち徳川家康に仕えた旗本で、いつから廻り田を領地としたのかは不明ですが、寛永二(一六二五)年には、廻り田のほかには武蔵新城郷(川崎市)と下総下泉村(千葉県袖ヶ浦町)に所領を持ち、あわせて九〇七石を領していました。

もう一家は富田氏でした。厳密には旗本ではなく、旗本の家臣であり、幕府から領地を与えられた武士としてはきわめて異例な存在でした。元和四(一六一八)年、幕府の老中・勘定奉行は、旗本伊奈氏の家臣富田吉右衛門に、廻り田村二〇〇石を与えています。

伊奈氏は、初代の伊奈忠次が家康の代官頭となり、関東はじめ全国の天領の年貢制度や新田開発、交通制度の整備に尽くし、幕府の全国支配や財政の確立に大きく寄与しました。その家老として、村々の検地や新田開発・治水などに実力を振るったのが富田氏でした。

ただ伊奈氏は、慶長十五(一六一〇)年、忠次が死去し、子の忠政は大阪の陣に活躍するなど忠勤を励みますが、元和四(一六一八)年三十四歳で死去し、少年の忠勝が残されました。幕府が富田氏に特別に領地を与えたのは、当主の死去による伊奈氏家臣の動揺を防ぎ、功臣伊奈氏とその家臣たちに、当面の幕府の課題である全国の天領支配の役割を継投させようとする目的があつたと思われます。しかし、翌年に忠勝は早世し伊奈氏は断絶します。幕府は、忠次の次男忠治を登用し、伊奈氏の仕事を継承させ、のち忠治は勘定奉行を経て初代の関東郡代となり、以後伊奈氏は関東郡代を世襲して関東の天領を支配しました。富田氏も伊奈氏の家老として、廻り田に領地をもちながら、伊奈氏の陣屋のある武蔵赤山(川口市)の屋敷に住みました。ただし、十七世紀には廻り田にも陣屋を構え、居住していたようです。十七世紀末、廻り田の陣屋は廃止され、十八世紀末には伊奈氏が改易されて富田氏も知行を没収されましたが、廻り田には今も富田氏の墓石が残されています。

近世担当 根岸茂夫